



「節目」と「被災者」ではくくれない 無数の沈黙と不安に耳を傾けて

フォトジャーナリスト
安田 菜津紀

「震災直後はねえ、海を見ることだけじゃなくって、魚を食べることもできなかったのよ。海の恐さを思い出しちゃうからねえ」

東日本大震災で1800人近い人々が犠牲になった、岩手県陸前高田市。長らく仮設住宅でひとり暮らしをするおばあさんが、ふとそんなことを口にしたのは、発災から5年近くも経ってからのことだった。それまで、何気ない話で笑い合うことはあっても、震災を振り返っての言葉を聞くのは、これが初めてだった。

人の心の歩調は、それぞれに違う。すぐに体験を話せた人、前に進んで「もう被災者とは呼ばれたくない」という人、話したいことがあってもいまだに語れない人、悲しみが癒えることなく刻まれている人——11年経った今の心模様は、「被災者」という大きな主語ではくくれないだろう。

震災当時、私の義理の父は、県立高田病院で副院長を務めていた。病院の4階で首まで波に浸かりながらも、辛うじて屋上に逃れることができていた。3月11日の夜、何とか助け出すことができた患者さんたちと、寒空の下、オムツやビニール袋を体に巻き付けて過ごしていた。なぜ、もっと多くの人たちを助けることができなかったのか。医師として、そして副院長としての自分を責め続けたという。

それから至るところで、「頑張れ、頑張れ」という言葉が響くようになった。洪水のように流れていく情報も、復興へ、という勢いに溢れていった。もちろん、その一つひとつが尊いものではあった。けれども「強い声」が響くたびに、義父の心が追い詰められていくのも分かっていた。

最愛の伴侶や愛犬たちも失った義父は、震災直後、患者の対応に追われるうちに倒れ、以後、他県の親族宅に身を寄せるようになる。陸前高田市には、近づくことさえできなくなってしまっていた。街に向かおうとすると手がふるえ、呼吸が乱れることもあった。自分は頑張ることができないから、だめなんだ。復興に貢献できていないことが後ろめたい、と日を追うごとに心を閉ざしていった。あの「頑張れ」という言葉の裏側には、あまりにも大切なものを失い、声さえ上げることができない無数の沈黙が存在していた。そんな心のありようは、震災からの年数を数えての「節目」で簡単に整理がつけられるものではない。

コロナ禍でも、「頑張ろう」「心を一つに」という言葉が飛び交う。ただ、それ以上に必要だったのは「不安を口にして」という声かけだったのではないだろうか。とりわけこの2年間、震災直後の義父のように、怒涛の日々を送ってきた保健所、医療関係者にも、その「不安」を伝えられる受け皿が不可欠なはずだ。



やすだ なつき

1987年神奈川県生まれ。上智大学卒業。認定NPO法人Dialogue for People (ダイアログフォーピープル/D4P) フォトジャーナリスト。同団体の副代表。東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害について取材。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。著書に「写真で伝える仕事 一世界の子どもたちと向き合って―」（日本写真企画）、他。現在、TBSテレビ「サンデーモーニング」にコメンテーターとして出演中。